

2019.12.01 第1主日待降節Ⅰ 聖餐礼拝

ルカ 1:46-55 「マリアの讃歌—私に目を留めてくださった」

聖書

46 マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、

47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。

48 この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。

今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。

49 力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、

50 主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。

51 主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。

52 権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。

53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。

54 主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けてくださいました。

55 私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

はじめに

今日から2019年の待降節（アドベント）に入ります。12/22の礼拝をクリスマス礼拝としますので、アドベントメッセージは12/1、12/8、12/15の3回となり、3つの賛歌に心を向けたいと願っています。3つの賛歌とは、マリアの賛歌（マグニフィカト）、ザカリヤの賛歌（ベネディクトゥス）、シメオンの賛歌（ヌンク・ディミティス）です。いずれの賛歌も、過去に礼拝で学んだことがあります。新しい気持ちでみことばに向き合ひましょう。今日はマリアの賛歌に心を向けます。

1. 私の救い主

マリアは開口一番「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をほめたたえます。」(46 節)と言いました。「あがめる」と訳されている語は「大きくする」という意味の語であり、そこから「ほめたたえる、尊敬する、目に見えるようにはっきりさせる、身をもって表わす」という意味になります。マリアは救い主の母として選ばれたことに恐れと戸惑いを持ちながらも、自分の身をもって神さまをほめたたえています。そこには、クリスマスの出来事をはっきりと「個人的」に受け止める姿勢が表れています。

個人的な受け止めを「私の救い主である神をほめたたえます。」と一人称で表現しました。ザカリヤの賛歌は「ほむべきかな、イスラエルの神、主よ」と始まりますが、マリアにとっては「イスラエルの神」ではなく「私の神」なのです。救い主であるイエス・キリストを「私の」と呼ぶマリアの心をクリスチャンの方々は理解できます。

多くの日本人はクリスマスを華やいだイベントとして楽しみ、12/25 をキリストの誕生をお祝いする日だと理解しています。しかし、クリスマスを「私の」と称することはなく、個人的な繋がりは全くありません。クリスチャンはキリストを救い主と信じています。その救い主はすべての人の救い主であるとともに「私の救い主」なのです。私の人格とキリストの人格が深く結びついているのです。ちょうど、自分の物を人が持って行こうとすると、「それ、私のよ！」と強く主張するようにです。キリストと私との個人的な関係性のゆえに、マリアの告白と私たちの告白は同じものなのです。今年のクリスマスに、「私の救い主」と呼ぶ方々が一人また一人と増えることを願います。今この瞬間にも、世界のどこかでキリストを「私の救い主」と呼ぶ人が起こされていると信じます。

では、マリアが「私の救い主」とほめたたえた理由は何だったのでしょうか。理由は二つあります。

2. 目を留めてくださった

マリアが救い主を個人的にほめたたえた一つの理由は、「この卑しいはした

めに目を留めてくださったからです。」(48節)。「あがめる」のラテン語訳が「マグニフィカト」で、その意味は大きくするというを先に述べました。マリアは神さまを大いなる方と理解している一方、自分を「卑しいはしため」と表現し、神さまと自分との隔たりは天と地ほどあることをよく分かっていました。このことは御使いがマリアに懐妊を告げたときのマリアの返事にも見ることができます。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」(ルカ 1:38)とっています。マリアは、自分はほんとうに小さな女奴隷に過ぎないにもかかわらず、そのような者に目を留めてくださったことに深く感謝し、救い主をほめたたえているのです。

天と地ほどの開きがあるにもかかわらず、神さまはどこか遠くにいる漠然とした方ではなく、私たちの内に共におられるという世界がキリスト教信仰の持つすばらしさです。共にいることを「目を留める」ことをもって示してくださいました。一人の存在に目を留めてくださる神さまは、今もこの世界の一人一人に目を留めておられます。人は辛い中にいるとき、だれも自分のことを分かってくれないと思い込んでしまいます。自分だけが孤独の中に取り残されたような感覚になります。多くの人が自分のことで精一杯で他の人のことなど構ってはいられないほど、忙しい毎日を送っていますから、辛さを抱えている人を見過ごしてしまいます。残念ですが私たち人間は誰かに目を留めることの限界を認めざるを得ません。でも、私たちを愛しておられる神さまは違います。一人一人に丁寧に目を注ぎ、心に留めていてくださっています。神さまの御目から漏れる人は一人もいません。

ナチス時代の収容所アウシュビッツの恐ろしい体験を書き記した『夜と霧』という本の紹介文で次のようなものがありました。「この本の中で、絶望的な状態では自暴自棄が死を招き、容易に自殺に走らせ、また病死に至らせることを書いている。そしてそういう時に人々を支えた思いが記録されている。『この困難な時、近づきつつある最後の時に、我々一人一人を 誰かが見ている。一人の友、一人の妻、そして神が』。この思いがその人々を生かしたというのです。それは見捨てられてさえないなかったら、誰かから顧みられてさえ

いたら、人間は人間として生き、耐え抜く力を持つということです。」

マリアに目を留めてくださった神さまは、今日ここにいる私たちにも目を留めてくださっています。愛に満ちた神の眼差しに支えられて、すべての人が生きることができるよう願います。

3. 大いなることをしてくださった

もう一つマリアが個人的に救い主をほめたたえた理由があります。「力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。」(49 節)。大いなることの内容が三つ記されています。まず筆頭が、処女マリアの救い主懐妊です。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」(ルカ 1:35) ということばの通り、処女マリアの上に聖霊が臨み、救い主イエスさまを懐妊します。処女はおとめとも訳されることばですが、誰のものにもなっていない清らかな身を神さまにささげるというマリアの美しさが表れています。その美しいマリアの心と身体に救い主のいのちを宿すという光栄は何にも代え難いものゆえに、「今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。」(48 節) と証しました。

さらに、聖霊によって誕生するイエスさまは、信じる者に逆転の生涯を与えてくださるゆえに、そのことも大いなることとして数えることができます。「心の思いの高ぶる者を追い散らす」「権力のある者を王位から引き降ろす」「低い者を高く上げる」「飢えた者を良いもので満たす」「富む者を何も持たせずに追い返す」とありますように、世の価値に対する転換が起こるのです。世の中では力、富、権力を持つ者が支配する者となりますが、イエスさまはそのような者の世間的な価値をひっくり返し、むしろ貧しい者、虐げられている者、弱い者、悲しむ者の友となり、そのような者たちこそ神さまに近くある人たちとして高く引き上げてくださったのです。かつては会社勤めをしていた私に価値の転換が起こり、会社を辞め牧師へと進みました。信じる者の内に起こった逆転の実例です。

最後に、神さまはご自分の約束に対して真実な方であることをマリアは証しています。旧約のアブラハムに約束された神さまのご計画が、今キリスト

によって成就したのです。どんなに長い年月が過ぎようと神さまは約束されたことを必ず守るお方です。約束を守るという点において、神さまは私たちとは全く異なります。人は自分のことばを簡単にひっくり返してしまいます。間違ってもごまかしてしまいます。しかし神さまはそうではありません。神さまはご自分でご自分を否むことができないお方なのです。ですから、どんなことがあっても私たちが愛し守ると言ったら、必ずそうされるのです。かつて旧約時代に、神さまがこの世に救い主を送ると約束されたからクリスマスが起こったのであり、救い主イエスさまの誕生は神さまの必然だったのです。神のことばの確かさがクリスマスによって見事に証明されました。

このようにマリアに大いなることをしてくださった神さまは、今も私たちに働きかけておられます。ご自分の大いなることを私たちに見せようと。

結び

神さまは私たち一人一人に目を留め、大いなることを成してくださいました。ですから、マリアの賛歌をもって私たちも主をほめたたえます。主は私たちに救いの恵みを注ぎ、今日まで右も左もわからない愚かな者を愛と忍耐をもって導いてくださいました。今私たちの信仰が保たれているのは、ただ主の一方的な憐れみと恵みによります。アドベントにあたり、主に心から感謝をささげ、「私は主のはしためです」と告白して、主のためにこの身を差し出しましょう。そうするなら、主は喜んで私たちを用いてくださいます。